

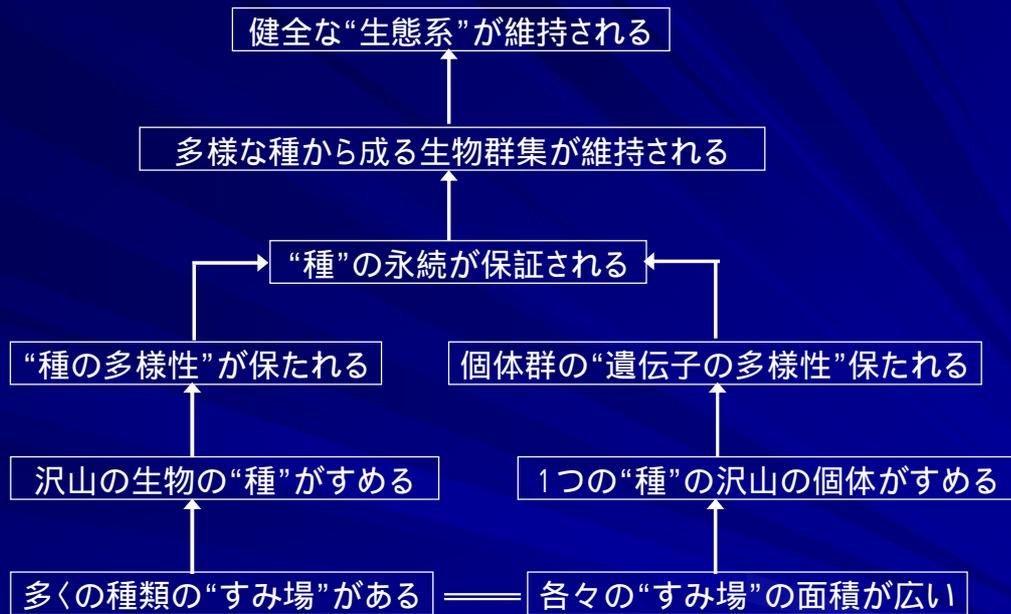
# 流域委員会での質問について

1

- 問15) 確認された重要種の取り扱いをどうするのか。
- 問16) 「福井のすぐれた自然」についても重要種の評価を行う。
- 問17) 水辺の国勢調査結果等の生データを提示するのではなく、河川依存性の高い種を抽出し、多様性評価などによって河川のどこが生物多様性の保全にとって重要かを抽出する必要がある。
- 問18) 保全遺伝学の考え方から、持続可能な生物なのか遺伝子解析を行うことによって、貴重種が本当に保全しなければならないか検討してはどうか。

確認された重要種については、産卵場所・採餌場所といった生息場所(すみ場の面積と多様性)、水辺の植物群落も含めた生息・生育環境を考慮すべきである。「種」を保存する場合、「種」によって生活史も異なり、他の生物との食物連鎖や生息のための相互関連性(タナゴ類と二枚貝といった多様な種からなる生物群集)、背後地形等についても考慮するということになる。したがって、河川工事等を実施するにあたっては、確認のための調査の実施や専門家の意見聴取を行い、対象となる種とその生息環境の保全のための工事实施方法・実施期間・移植等について検討を行う。また、専門家の意見聴取のうえで必要に応じてモニタリング調査を実施する。

2



(すみ場・種・遺伝子)の多様性と健全な生態系の関係  
 出典:生き物の水辺 水辺環境学3 著者 桜井善雄

問27 「正常流量の確保」について、どのような展望を持っているのか教えてほしい。

正常流量の確保については、広域的かつ合理的な水利用の促進を図るなど、今後も関係機関と連携して必要な流量の確保に努める。そのためには、情報提供・情報伝達体制を充実させ、水利使用者相互間の水融通を円滑にするなど、関係機関及び水利使用者等と連携して進めることが必要である。

問36 北川自然再生計画の目標設定の昭和30年代前半に設定した理由を示してほしい。

昭和20年～30年代の北川の姿

水の流れが豊かであった。

川の上下流はつながり、魚等生物の往来は自由であった。

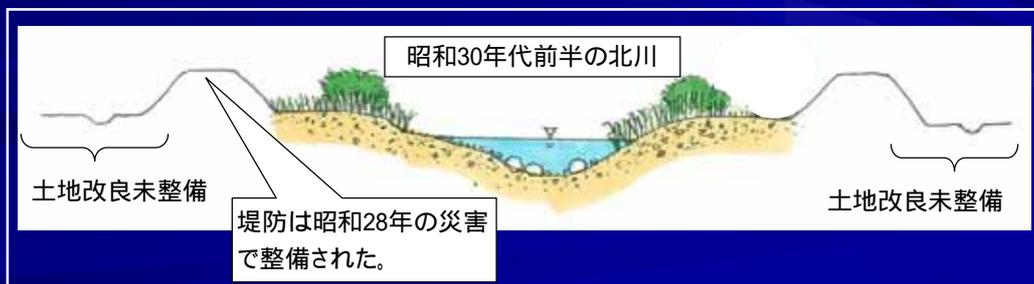
みお筋は蛇行し、瀬・淵が明瞭で河原や河畔林等多様な環境であった。

田、水路、河川はつながりエコロジカルネットワークが形成されていた。

かんがい、草木利用、魚獲りなど人と川の関係は密接であった。

北川の堤防は、昭和28年の災害を契機に整備された。

昭和28年災害の整備後も瀬・淵・河原、ヤナギや低木の河畔林が残っていた。



5



昭和38年の航空写真より確認し、

目標は、『昭和30年代前半の北川の姿を再生する。』と設定した。

6